

天眠文庫蔵

與謝野寛

日明子書簡

植田安也子／逸見久美編

八木書店

〈編者略歴〉

植田安也子 うえだあやこ

1903年 大阪府に生まれる

1920年 大阪府立清水谷高女卒

現住所 京都市上京区室町上立売南

逸見久美 いつみくみ

1926年 兵庫県芦屋に生まれる。

1947年 青山学院女子専門部国文科卒業

1950年 早稲田大学文学部国文科卒業

1953年 早稲田大学文学部国科大学院修了

1972年 実践女子大学日本文学研究科博士課程修了

現 在 女子聖学院短期大学教授

青山学院女子短期大学講師

著編書 「評伝與謝野鐵幹 晶子」・「みだれ髪全集」・
「与謝野晶子全集」

現住所 東京都文京区西片2-1-4

TEL 03-813-8457

天眠蔵
文庫

與謝野寛 晶子書簡集

定価 7,800円

昭和58年6月7日 初版第1刷発行

編 者 植 田 安也子
逸 見 久 美

発行者 八 木 敏 夫

発行所 株式会社 八 木 書 店

〒101 東京都千代田区神田小川町3-8

電 話 03-291-2965／振替 東京 4-10457

製版 平和堂 印刷所 上毛印刷 製本所 橋本製本所

1095—9064—8500

序にかえて

植田 安也子

父天眠小林政治は、明治十年七月、兵庫県北条の旧家に父達二郎母くにの次男として生まれたが、十歳のときから母方の叔父である明石の医師小野寺秀太の許で養育された。明治二十三年、医師をめざして姫路中学に入るが、病氣のため明治二十五年、三年終了後、郷里での一年の療養生活を経て大阪船場の丁稚修業に入り、船場安土町に毛布卸の看板を掲げたのは明治三十二年九月のことである。郷里での療養中を文筆に親しんだ父天眠は、明治二十九年以来、柎吉、小橘、天眠等の筆名を用いて小説を投書、当時の文学青年の道を歩みはじめる。明治三十年四月発足の「浪華青年文学会」（のち関西青年文学会）の機関誌「よしあし草」（のち「関西文学」）はその年の七月に発刊され、その十七名の発起人中には天眠も加わっていた。

この「よしあし草」同人のうち天眠は、中村吉蔵、中山梟庵等を生涯の友として得ることになるが、与謝野鉄幹、鳳晶子を識ったのも「よしあし草」のころであった。

すでに「よしあし草」に詩歌を寄せていた鉄幹与謝野寛は「明星」を創刊し、明治三十三年の夏、「関西青年文学会」の例会で鉄幹の講演を聴くべく、来阪の鉄幹を迎えたのが鉄幹と天眠との初対面という。一

方、鳳晶子も「よしあし草」に詩を投じ始めていたが、天眠はかけちがって会えず、晶子に初めて接したのは晶子の結婚直後、明治三十四年秋、天眠が上京して渋谷の新詩社を訪ねたときと聞いている。以来与謝野寛、晶子と天眠との親交は続いて、往時の東京、大阪間を多くの書簡が往復した。現存する寛・晶子書簡は四百五十九通、明治時代に始まり、それぞれその歿年近くに及んでいる。

天眠は、大阪船場の一商人にすぎなかった。晩年にしてようやく幾許かの余裕を生じたかもしれないが、その生涯は浮沈きわまりないものであった。天眠がみずからいう「明治文壇に於ける登竜門に押寄せた雑兵中の一人」としての小説の筆を折ってからも、天眠を絶えず慰め励ましたのは、消えることなき文学への憧憬と情熱ではなかったのだろうか。天眠は文学を志す友に応分の手伝いを忘れず、それをみずからの苦境を切り抜ける一筋の救いとさえしていたかとも思われる。またそんな天眠に対して、寛、晶子からは必ず深甚の配慮と、聡明な助言による救援の手が差しのべられた。まことに小林天眠が与謝野寛、晶子から受けた友情は篤かったのである。

晩年の父天眠は、京都在住の新村出、高田保馬、吉井勇、小泉孝三他、岡山の中山梟庵ら旧「よしあし草」同人や新詩社関係の各地の人たちとの交遊を何よりの喜びとしていた。そして昭和二十七年には遺された書物冊子など明治時代の文献類を一括してささやかな天眠書庫をつくり、最後には天眠文庫設立の構想を抱いていたが、昭和三十一年九月永眠した。父存命中からも与謝野書簡の大切なことは聞いていたが、天眠文庫の概要を知るため、塩田良平先生の夫人忠子様が昭和三十四年春入洛滞在されとき、私も夫人と共に与謝野寛書簡を垣間みることができた。

与謝野晶子書簡集は、昭和二十三年、晶子の高弟岩野喜久代夫人と父天眠の手で出版されている。この度の晶子書簡に与謝野寛書簡を加えることは、「明星」の周辺とその時代背景を鮮明にすることであり、ひいては与謝野寛、晶子の生涯を知る上にも新しく光を与えることになるのではないだろうか。それに明治の友情、鉄幹与謝野寛、与謝野晶子、天眠小林政治との親交のほどは、時代を超越して推測され、実感されることであらう。

ただ大阪から京都へと度かさなる移転、その他の理由で散逸、紛失した与謝野書簡の数は多い。小林宛の与謝野書簡が出まわっている話は聞いていたが、父母の歿後その数は意外に多く、故本美鉄三氏の言によると、天眠宛書簡のみで作成された与謝野書簡の目録さえ古書店から出ていたという。

現存する書簡を今の間にまとめておきたいとの願望を理解し、与謝野光氏はこの度の書簡集出版を快く許可された。そして与謝野研究に専念される逸見久美夫人のひとかたならぬご尽力で、いま一本となることは思えば夢のような喜びである。この出版をお引受けくださった八木書店専務八木壮一氏に深謝すると共に、出版につき種々のご指示をいただいた塩田忠子夫人をはじめ、弘津千代、岩野喜久代夫人、お世話に預かった石田アヤ、平子恭子、鳳祥孝、入江春行、中村雄蔵、金田弘、井田ます子の諸氏、長年にわたって種々の調査や質問に応じてくださった京都府立総合資料館、その他の各位に心からの御礼を申し上げたい。私はいま病床にあり、余りにも思い出多いこの書簡集完成についての感慨を適切にお伝えできぬことを申し訳なく思っている。

昭和五十七年十月

凡 例

一、本書は小林政治（天眠）蔵の与謝野寛・晶子の書簡を収めた。よってすべて天眠一家宛の書簡である。しかし「付」として関わりのある三通の書簡をも収めた。

一、本書は凡て原書簡を定本として編集し、すでに活字化されたことのある書簡はこれを参照したが、その際、活字化された書簡における年月日などの誤りはその根拠を挙げて訂正した。

一、原書簡の本文翻刻は厳密に行なった。即ち「大阪」の「阪」・「等」・「藉」など原文通り「坂」・「等」・「藉」と翻字した。しかし「文」・「務」などは「丈」・「務」と現行の活字を使用せざるを得なかった。その他、改行、字配りは原文通り再現したが、本文中句読点のないものは可読性を考慮し、一字分の余白をとるよう努めた。

一、書簡一通を一項目とし、各書簡の見出しの頭に通し番号を付した。

一、各書簡の配列は差出し年月日順とし、その書簡の日付を優先し、消印で補った。日付、消印で配列を決定できないものは、決定の理由を註記し、相当する箇処に配列した。

一、各書簡の日付の次には宛名とその住所、発信人とその住所を記したが、字配りは必ずしも再現し得なかった。また発信人の下に寛・晶子それぞれの通し番号を付した。発信人の記名のないものは寛・晶子それぞれの筆蹟・内容から判断して「寛」・「晶子」と発信人を補った。

一、研究の便を計るため、「註」の下にすでに活字化された各書簡の出所を明示した。また未発表のものは各書簡の通し番号の上に「未」と入れ区別した。

一、書簡中に書かれた短歌に付した数字は、各歌集中の通し番号であり、註欄にはその校異を掲げた。

一、註は主として逸見が付し、植田の註は安也子註として区別した。『与謝野晶子書簡集』（大東出版社・昭

和二十三年刊)に付されている天眠の註で、特に理解を助けられるものは天眠註として註欄に残した。本文に註記を要する場合は*印を付して、註の後に置いた。

目次

序にかえて 植田安也子 i

凡 例 iv

明治期 1

明治三十五年 3

明治四十二年 17

明治四十五年 39

明治三十六年 9

明治四十三年 23

大正元年 48

明治四十一年 14

明治四十四年 27

大正期 53

大正二年 55

大正五年 132

大正八年 267

大正十一年 355

大正三年 76

大正六年 155

大正九年 294

大正十二年 359

大正四年 97

大正七年 189

大正十年 345

大正十三年 364

昭和期

大正十四年 372
大正十五年 383
昭和元年 399

昭和二年 407
昭和三年 413
昭和四年 432

昭和五年 452
昭和六年 459
昭和七年 470

昭和八年 490
昭和九年 510
昭和十年 522

昭和十一年 536
昭和十二年 540
昭和十三年 543

昭和十四年 552
昭和十五年 563

あとがき 逸見久美 573

天眠(小林政治)略歴 593

索引

人名索引 2

事項・地名索引 9

詩歌一覽 10

明
治
期

自明治三十五年一月十一日
至大正元年十二月二十日

一 明治三十五年一月十一日⁽¹⁾

封筒ナシ
毛筆 巻紙 18×130・6

〔寛〕 1

その夜の御ものがたり⁽²⁾まことによく小生へお打あけ被下候御志ありがたく感激致居候 その後の御成りゆき
窃かに御洩し被下度候、

大丈夫、俗物同様に朽ち候ならば 世の毀譽を氣にして心ならぬ一生を淋しく送るの要も有之候へども学問
にもあらず儀式にもあらぬ人間の至情に係る問題に就てはお互に別に偽るの要なく之を忍ぶの要無之候 五
十年と申候ても誠に電光石火也 百年の榮華ハ迎も企てがたく候に何故にその天真の性情を偽りて冷寂なる
生活を送るべきや 我兄の非凡なる人となりより見て決してこの「情」の上の苦闘にも御捷ち被成⁽³⁾遊候事
の出来べしと信じ申候 躊躇する勿れ 人は見す／＼鬢に雪を見るべし あたら青春妙齡の恋人を大兄の爲
めに空しく老いしむべけむや 能く／＼宮本兄と御協議も必要に候へども情はもと内より発す 決して他人
の指図に従ふ事 彼の道德倫理の如き無味乾燥せるものに非ず 自ら燃ゆる二人者の情火あゝ誰か之を咎め
て制し得べきとするぞ

小生は大兄の幸福を祈る外何も申すの要なしと存候 御勇断の筆に出でられ度候や

一月十一日夜

天眠大兄 必御直披

註 與謝野寛書簡抄(五)―冬柏六卷九號(昭10・9・28)43頁掲載。

1 推定Ⅱ小林政治と植田雄子との結婚話による。 2 小林天眠(本名政治)と植田雄子との縁談。 3 宮本富士一。

二 明治三十五年十月七日⁽¹⁾

封筒ナシ
毛筆 卷紙17・7×358・5

〔寛〕 2

拜復

平素の御疎情萬々お赦し被下度候 この度は九州よりの御懇書こまゝと御高情のほど感激の外無之候 夫と共に御封中の品まことに御禮の申しやうも無之候 小生如き者をさほどまでに御助成下され候事かと忝く奉存候 木石にあらぬ身決して疎そかには不存申候 「明星」の維持は固より困難に候へども毎月大兄の如き篤志の畏友より補助せられ候爲めに辛うじて醜態を破綻するに至らず 加ふるに幾多の交友は何れも報酬の念を放れて毎月心血の文字を寄せくれ候ゆゑ内容もまた事実上進歩のあと有之候は小生が過分の榮誉とする處に御坐候 小生もまた日夕一身の安逸などは毛頭念ひ不申専ら健闘精勵の所存にて起き臥し致し居り候たゞ残念なるは財政不如意のため恰も火山の上に立ちて活動するの感有之頓と一日も後顧の憂なくして文筆にたづさはり難き事に御坐候 乍去これも天賦の小生の運命也 他を羨まずしてこの中に苦闘可致候間この微衷を御洞察被下御助勢願上候 兄が日夕牙等の事に勤勉にして着々奮闘し玉ひつゝ傍ら文藝の趣味に慰藉を求め玉へるも真に男子の快事也 人おの／＼天分に從ひて活動すべきに候へば兄は兄の道に小生は小生の道に互にこの生のあらむがよりは健闘可致候 かくして功あるも功なきも毫も遺憾なき事に候 彼の醉生無死の小人の真似は唾棄するの外なく候

土田桂舟君過般拙寓へ御來遊被下候 晩学云云と頗る悔まれ候につき小生は大にその勇氣を稱賛し人は百年活きるも爲す所なくは死物也 三日活くるも志す所を行はゞ この世に生れし職責は全し 壯年なるが故に讀書して恥づるの理なし たゞ人は空しく老いざるの覺悟必要也など老人めいたる忠告も致し又作家として

の心得をも小生の愚見丈を参考として申おき候 晩学と申しても小生などよりは餘程の年下也 人間の成功不成功は僅々五六年に決すべしと存候

○

さて本月一日の夜汽車にて小生突然下坂致し申候 之はこの夏以來金尾⁽²⁾より受取るべき稿料有之幾度督促致候ても埒あかず候ゆゑ断然些少の旅費を都合致し下坂致候處金尾云く、目下仕入どきに於て現金なし 何卒十一月廿五日拂の約束手形にて御受理被下当地にて他にて夫迄の所を御工夫被下度し云云、之には小生も困り入り実は非常に困厄の極なればこそ督促などは大嫌ひの男がわざ／＼下坂せしに一文も現金は支拂ひ難しとは意外と存候間如何にせば善き乎を御相談のため三日の朝御宅へ御訪問致候處 恰も九州へ御旅行中との事にて遺憾千万に存じ候 其節御令夫人様に御面會しながら金尾との再度の談判に氣がせきし／＼御話も申さざりしは失禮でもあり又殘念にも候ひし 何卒よろしく御夫人様へおわび被下度候 一見兄が理想の君丈ありておしとやかなる君とうれしく存じて引取申候 夫より金尾へ参り候處差出地大坂、支拂所川上銀行、支拂期日十一月二十五日、小生宛にて、額面は八拾圓也、この手形を貰ひ候まゝ他に相談の人も無之候故三日の夜汽車にて空しく歸京仕候

右につき折入て大兄に御相談は若し御差支なくば御手元又は御地の銀行にて右八十圓の手形を割引とやら致し七十金位に御替へ下さる輕便の御方法に願はれまじく候や 實は東京にて友人に相談致候處 金尾君の名は頓と東京に信用もなき事故当方にては夫までの間空しく手形を篋底に秘むるより外に詮方無之候 小生も困厄の際にあらずは十一月二十五日まで如何やうにも辛抱可致候へども目下紙屋へ前月分の「明星」の用帋を拂はねばならず荊妻が本月の分⁽³⁾娩用の費用も要し次には「明星」出版費不足の爲め秋、冬の夫妻の衣服一

切典物と致候などのお恥しき義につき其等の衣服も三四枚は引き出し度く旁々至急入用に候へば何卒この手形を割引したくと存候次第に御坐候

若し幸に何とか兄の御手元にてお裏書にてもなし被下御取引の銀行にて割引致し呉候はゞ仕合千万に存候さすれば折返し御一報被下度小生はこの裏面へ小生より貴兄への裏書を致し捺印の上御届可仕候

こは金尾へ向け大兄より御問合被下候て毫も差支無之金尾も何卒大坂にて御融通被下候やうと申候程に候以上願る御面倒なる義に候へば金尾と大兄との間に御遠慮も有之候はゞ何卒御放任被成下度若し御都合被下一時十一月廿五日まで割引の上御取替被下候事相叶ひ候はゞ幸に奉存候 御多繁中折入て御願ひ申上候 尤も金尾へ先づ大兄より御問合被下候やう奉願上候

○

御禮をかねて右御面倒御願ひまで如此に御坐候 晶子よりくれぐれもよろしくと申出候
御夫人の君へも同様申出候

艸々拜具

与謝野 寛

十月七日夜

小林天眠兄 御直披

註 雲珠三卷十號(昭30・10) 1—2頁掲載。

- 1 推定—長男出産(明35・11・1)直前に由る。
- 2 金尾思西のこと、金尾文淵堂主人で、與謝野夫妻とは終生親交のあった人。
- 3 長男與謝野光分娩のこと。

明治三十五年

三 明治三十五年十月二十九日

消印

青山^{三・二〇・三〇}
大阪^{三・二〇・三二}

毛筆 和紙封筒19×7・9
卷紙17・9×302・2

大坂市東区安土町一丁目

小林政治様 御侍史

十月二十九日夜

東京澁谷三八式
与謝野 寛 3

菊もみぢの時節とも相成申候 詩人が口ぐせに興ありと申は時雨も世のほだしわぶる身にはいぶせく心なき
景物の一つと存ぜられ候

おさはりも候はずや 歳の暮もせまりて候へばおせはしさも一しほにぞ候べき 健闘をもて人生の旨義とし
玉ふ大兄にはさる事ながら朝よひのお氣づかひもまた太切に遊ばされ度候 人は存外にもろき事あり 近く
亡くなりし佛のゾラの如き あのやうの死にざまはなんぼうくちをしき事に候はずや ゾラの如きは十九、
二十兩世紀の世界文學史に最も光ある星斗の人に候へども我等風情は今死ねば路傍の枯れくさ遣らむにほひ
も候はんや かく思へば貴き光陰に候 又貴き命に候 空費しては成らずと存じ候

先頃の御迷惑の件 お蔭を以て意外にあまたお送りに預り候へば滞りをり候「明星」の帛代、彫刻費等を濟
ませ残りにて家賃、米炭のおひめも償ひ 夫婦が秋冬の着料も質受致し 生まるべき小兒⁽¹⁾のウブギ其他の用
意も出来て候 こは一に大兄の御懇情に依り候事と兩人とも毎日のやうに申し合ひをり候 延引ながら此に
謹で御禮申述候

朗讀會⁽²⁾の公開は時期ニ適し候と見え 意外に他數の來會者有之滿場の靜肅他に例の無き上品なる公會に候ひ
き 青年が世に立つて思ひしよりも勢力否実力を認めらるゝ事になりしを天に謝し候 來年は四月頃博覽
會の眞最中に東京の會員と京の月郊⁽³⁾ 吉⁽⁴⁾郎、御地の泣菫、木兄⁽⁵⁾、諸氏相合し 御地にて第二公開相催し
先づ多數の耳目を驚かし申度と夫々朗讀の工夫に努力致居り候 その節は何卒大兄外諸兄の御斡旋を奉希上